

目的 近年企業における生活研究が盛んになってきた。市場に製品が氾濫し、何を作るべきか模索する状況の中、ユーザーニーズを捉え、これからの生活のあり方を予測する研究が必要不可欠になってきた。生産する製品の内容や技術力によって、実現される問題解決のしかたは異なるが、しかし、どんな製品開発においても、基本的には、生活実態をつかみ、足りない面や問題点は何か、さらにはどんな生活が求められているのか、という生活の把握が出発点となる。現実には、あまりにも単サイクルで物が作られ、こうした過程から開発が進められ具体化することはまだ少ないが、日頃から生活関連の基礎研究を企業独自に行うことが製品開発の独自性に不可欠だと考える企業も増えてきた。本研究では、生活実態を捉えた調査をどのようにデザインの問題として考え、さらに提案に結びつけていくのか、具体化した事例を通して、そのデザインの方法を報告し、検討する。

方法 事例のハンガーは使用実態を捉えるため、女子大生98名、母親93名を対象にかける収納方法の問題として調査を実施した上で、問題点を抽出して解決方法の可能性を探り具体的な製品に展開した。また、製品と使用テストからデザインの評価を行った。

結論 生活実態から出てきた問題点は、道具レベルで解決するものと、生活者の意識や社会のシステムにまで関わるものがあるが、あらゆる面をデザインの問題として幅広く考えた上で、問題をしぼることが生活提案としてのデザインには重要である。したがって、調査にあたっては、単にその物の使用実態にとどまらず、物を取り囲む生活背景や生活行動など生活者のルールやシステムを明らかにする視点が大切である。